『彫刻と写真の汽水域 －作為される光－』

東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程
彫刻研究領域
学籍番号 1318912 倉本弥沙

要旨

本論文は、真鍮を主な素材として彫刻制作を行ってきた筆者が、降霊写真に自身の作品制作との相似性を見出したことを起点に、自作品の変遷を俯瞰して論じる創作論である。筆者の意識世界で緩やかに混ざり合ってきた、彫刻と写真の汽水域で起こってきた出来事と、過去から今に至る様々な出来事が、現実に対してどのように作用してきたのかを明らかにし、自身の作品が、なぜ構造がわかるような構成をとるのか、なぜ「信じること」に対して拒否感や羨望、こだわりといったジレンマがあるのか。本論文では自作品について、しばしば関連を指摘される「死」という要素を鍵に考察する。

本論文の構成は、以下の 3 章で構成される。

第 1 章「光が映し出したもの－幻想と生きる－」では、まず W.H.マムラーの降霊写真群を挙げ、写真技法だけでなく、これらが作られた背景を提示する。降霊写真とは、目に見えない非合理的存在だったはずの霊を、物質化(「証拠化」)することである。先行研究によって「写真」というメディアの「死」との親和性の高さ、「死（他界）」という概念が共同体を形成・維持するための幻想といかに関係しているかを確認する。そして降霊写真にはこれらが両方見て取れることを論じる。また、筆者が降霊写真に出会う前に行っていた暗室作業では掴めなかった「彫刻」と「写真」の交点を探る試みにもこの章で触れる。

第 2 章、真鍮の「光」では、自作品内で真鍮という素材を使用する意味が、真鍮を使用し始めた頃から現在に至るまでどのように変化してきたかを時系列に沿って確認する。過程で、真鍮を磨くという行為は何かを信じたいがために黄金の光を放つ状態を「維持」しようとする身体性を伴った行為であり、行為をやめてしまえば（素材への介入をやめてしまえば）否応なしに錆びていく真鍮を、それでも作品に使用することは、「信じる（盲信)」ことから逃れようとする相反した心の動きであるという気づきを得た。それにより自作品が、この相反する状態自体を表すものであると解釈するに至った。

第 3 章「汽水域で起こること」では、博士審査展の提出作品《night cruising》《私たちは湖には行けなかった＃1、＃2》の三点を主軸として述べ、作品内外で結びついているイメージの要素を紐解いていく。作品制作方法と選択するイメージや構成方法がどのように結びついているか、自作品と参照作品を例に述べ、一見結びついていない要素が筆者の意識・無

意識下でどのように作用し合ってきたかを明らかにする。

自作品は、どの作品も一点（または作品を取り巻く空間）に視点を集中させ作品の世界観に没頭させるものではなく、視点の変化（切り替え）や構造を意識させるような構成をとっている。それは筆者にとって自作品を構造を意識するという体験をするための「装置」であると捉えているからだ。私たちが生活している社会にはいくつもの構造が存在しており、それは普段見え辛く隠されている。しかし、構造体のように見える鉄の線で作られた作品やすでに種明かしされイリュージョンのない作品は、本来隠されているべきそれらの構造が露呈している。そのことによって鑑賞者は居心地の悪さを少し感じるかもしれない。しかしその居心地の悪さは、己が明晰性を獲得するための過程にあることを示唆し、結びとする。